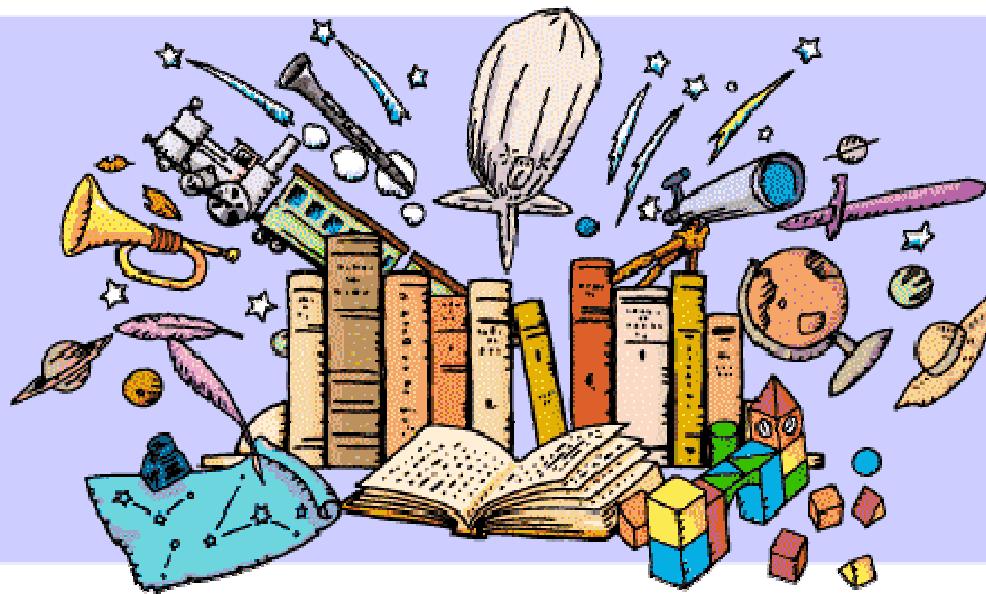


第 11 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「どうして」

宮城県 秀光中等教育学校2年 川上 雅子



賢治のまちから  
**全国高校生★童話大賞**

優秀賞〈銀の星賞〉

『どうして』

宮城県 秀光中等教育学校二年 川上 雅子

小学四年生の光汰は、クラスのいじめられっ子です。今日も教室の自分の席で、一人読書をしています。光汰が本の世界に入り込み、周りが目に入らなくなつたそのときです。

「あつ。」

光汰の手から本が抜き取られました。驚いて顔を上げると、目の前にはにやにやといやらしい表情を浮かべる剛の姿がありました。剛はいじめっ子のリーダーです。手には光汰の本が。

「返して！」

光汰は立ち上がりつて手を伸ばしました。しかし、剛はひょいと高く持ち上げてしまい、背の低い光汰には届きません。ぴょんぴょんとどび跳ねる光汰をおもしろがっている様子です。

剛は本の題名を見ると、クラス全員に聞こえるように声を張り上げて言いました。

「『くまの子クウ』だつてさ。四年生にもなつてこんなおこちゃまの本かよ。」それを聞き、クラスの男子たちは一斉にげらげらと笑います。光汰は顔が熱くなるのを感じてうつむきました。

「ほら、見てみろよ。」

剛はひょいと男子の一人に本を投げました。

「ああつ！」

光汰はあわてて追いかけて取り返そうとします。しかしその男子も、光汰が自分の周りをぴょこぴょこと跳ねているのをおもしろがっているのです。

「ほらよ。」

今度は、さらに別の男子が本をキャッチしました。光汰も急いで追いかけます。



本は光汰をもてあそびながら、次の男子、次の男子へとクラスをめぐつていきました。

光汰がさすがに追いかけ疲れたとき、本は隼人の手にありました。

「ハヤトくん……。」

光汰の幼馴染おさななじみの隼人は、何でもできる頭の良い子です。そして光汰とは大の親友でした。しかし、四年生になつてから、隼人はいじめっ子グループの中にいます。

隼人は光汰とは目を合わせずに、次の男子に本を手渡しました。その男子は本を受け取ると、大声で言いました。

「みんな、見てろよー！」

ゴミ箱の方向に向き直ると、大きく振りかぶります。光汰が止める間もなく本はその手を離れました。きれいな放物線を描き、ドサッ、とゴミ箱に入る音がしました。

「ナイスショート！」と言った剛の声が聞こえました。

光汰は学校の帰り道をとぼとぼと一人で歩いていました。「どうしてみんなぼくをいじめるんだろう。それに、ハヤトくんまで……。」

光汰は、はあ、とため息をつきました。

「コウちゃん。」

突然、光汰を呼ぶ声が聞こえました。驚いて振り向くと、隼人が走つてくる姿があります。

「ハヤトくん！」

「しつ！」

思わず大きな声を出した光汰を隼人はさえぎりました。

「そうだよね、ぼくと話しているの見られたら、ハヤトくんもいじめられちゃうもんね。」

隼人はそれには答えず、肩で息をしながら言いました。

「コウちゃん、今日は、ごめんね。今はあいつらのグループにいるけど、でも、俺は本当は、コウちゃんの味方だから。それだけ言っておきたくて。」

そういきると、立ちつくしている光汰をおいて、走り去つてしまいまし  
た。

# 賢治のまちから 高校生大賞開幕



次の日の朝、光汰は通学路を歩いていました。いつものような重い足取りではありません。隼人が本当は光汰の味方だと聞いて、ほんの少し心が軽くなつたのです。

光汰の前の方を隼人が歩いているのが見えました。光汰は駆け寄ると、周りに人がいないのを確認してから声をかけました。

「ハヤトくん、おはよう。」

「……。」

隼人はちらりと光汰を見ると、逃げるように行きました。

「……だれか、見てたのかな。」

光汰はそう呟くと、とぼとぼと再び歩き始めました。

その日学校で、光汰は隼人の様子がいつもと違うことに気が付きました。「剛つてさあ、調子乗ってるよな。俺らに命令ばっかりして。」

「あいつの言うこと聞くの、もうやめようぜ。性格悪いし。」

隼人はいじめっ子グループの仲間に、剛の悪口を言ふらしているのです。「そうだよな。」と同調する男子もいれば、「そこそと剛に報告する男子もいました。

「ハヤトくん、どうしてあんなこと言つんだろう。悪口なんか絶対言わないのに。」

光汰は不思議でした。そしてふと、昨日言つていたことを思いだしたのです。

「もしかして、ぼくのために……。」

光汰は、隼人が一人になる瞬間を見計らつていました。そして、放課後になつて、やつと二人きりで話すチャンスを見つけることができました。

「ハヤトくん、あのさ、今日どうしてあんなこと言つていたの？ もしかして、もしかしたらだけど、ぼくのため……？ それなら、そんなことしなくていいん……。」

一生懸命話す光汰を、隼人はさえぎりました。



「何か誤解しているようだけど、どうして俺がお前なんかのためにそんなことをしなくちゃいけないんだい？ それから、光汰といふと俺までいじめられるかもしれないだろ。近寄らないでくれ。」

隼人は冷たく言い放つと、足早に去つて行きました。

「ハヤトくん……？」

光汰は涙が出そうになるのを必死でこらえました。今まで見たことのない隼人の冷淡な表情が何度も思い起された。

次の日から、クラスの男子は全員隼人を無視するようになりました。また、隼人も完全に光汰を無視しました。

「ハヤトくん、ああ言つてくれてたのに。」

光汰は隼人の行動に傷つき、毎日沈んでいます。剛たちは、たいして反応しない光汰にちょっとかいを出すことが少しつまらなくなつてきました。

そのころ、生徒たちの間ではカードゲームがはやつていました。もちろん光汰のクラスも例外ではありません。光汰と隼人を除く男子たちは、休み時間ごとにカードゲームで盛り上がっていました。

あるとき、クラスの男子の一人、祐一郎がとてもレアなカードを手に入れました。他の男子たちは口々に「いいなあ」と言つては羨うらやましがっています。祐一郎も気分がよく、誇らしげに自慢しています。

そこで、どうしてもそのカードが欲しくなった剛は言いました。

「祐一郎、俺のカード五枚やるから交換しようぜ。」

しかし、祐一郎はあわてて首を振りました。

「いくら剛でも、このカードは交換できないよ。」

それでもあきらめられない剛はさらに言いました。

「それなら、好きな十枚やるよ。十枚なら文句ないだろ？」

祐一郎は、始めは驚いた顔をしましたが、それでもうなずきませんでした。

「やっぱりこのカードはあげられないね。」

一瞬、何人かは剛が怒りだすのではないかと思いました。しかし、タイミング良く担任の由梨先生が教室に入ってきたので、皆自分の席へと戻りました。

# 賢治のまちから 高校生大選挙大会



その日の放課後です。掲示係の光汰は由梨先生に言われて、教室の後ろの壁に皆が授業で書いた絵をはつていました。皆帰つてしまい、教室には光汰の他にだれもいません。

ガラガラ、と扉を開ける音がし、光汰は（由梨先生かな）と思いながら振り向くと、入ってきたのは隼人でした。光汰は一種の気まずさを感じながら作業を続けました。

隼人はまっすぐ祐一郎の席に行くと、道具箱を出して中をあさり始めた。

「何してるの？」

光汰は驚いて声を上げましたが、隼人は返事をしません。

隼人は道具箱の一一番奥から何やら取り出しました。それは、あのリアな力ードでした。隼人は、今度は剛の席に行くと、それを剛の道具箱の中に入れてしまいました。

「ハヤトくん……、隼人君、何やつてるの？」  
あぜん

唖然として光汰は聞きました。

「見ての通りだよ。明日何が起くるか楽しみだね。」

光汰は久しぶりに隼人の声を聞いたような気がしました。

「剛に目に物をみせてやるんだ。光汰にとつても、見ているだけで剛に仕返しができるんだからいい話だぜ。明日、まさか俺がやつたなんて言わないよな。まあ、気の弱いお前にそんなこと言えるはずないか。」

隼人はそう言つて鼻で笑いました。

（隼人君は、もう前のハヤトくんではなくなつてしまつたんだ）と光汰は感じました。

次の日の朝、剛が遅刻ギリギリで教室に入ってきたとき、クラスは大変な騒ぎになっていました。

「剛、人のもの盗むなんて最低だぞ！」

祐一郎が剛に向かつて怒鳴ります。当然剛はわけがわからないといった表情です。

「祐一郎君、まず話を聞いてみなきや。それからよ。」

由梨先生が祐一郎を諭します。



そんな様子を光汰は自分の席からじつと見つめていました。隼人はみんなの輪に入つて事の成り行きを見守っています。

「何のことだよ？ 何があつたんだ？」

剛は必死になつて言いますが、祐一郎を余計に怒らせただけでした。

「とぼけるな。朝見たら俺のレアカードが無くなっていたんだ。もしかしてと思って見たら、お前の道具箱の中にあつたんだぞ。」

これに驚いたのは剛の方です。

「そんなの今初めて聞いたぞ。俺は盗んでないよ。」

剛はあわてて言いますが、前の日のこともあり、光汰と隼人を除いてはだれも信じていませんでした。

「剛じゃなきや誰がやつたっていうんだよ。」

他の男子たちも祐一郎に加勢します。剛は焦り始めました。剛がやつたことになつてしまつたら、一人怒られるだけではなく、親まで呼び出されてしまうかもしれません。剛は少し考えてから口を開きました。

「そうだ、昨日光汰は掲示係で放課後残つてただろ。本当は誰がやつたか見てたんじゃないのか？」

それを聞いて、全員の視線が光汰に集まりました。光汰はいつもよりさらに小さくなりながら、（剛が盗んでいるのを見たつて言つたらどうなるかな）などとぼんやり考えていました。

すると、突然剛が大きな声を出しました。

「わかつたぞ！ 僕に仕返しするために、光汰がやつたんだ。これは光汰が仕組んだことなんだ！」

これには全員言葉を失いました。なぜなら、だれも光汰がそんなことをする子だとは思つていなかつたからです。

光汰も、本当のことを言おうと思つたところでしたが、すっかりその気が失せてしまい、今まで剛にいじめられてきた数々のことが思い出されました。

「剛、墓穴を掘つただけだつたな。早く祐一郎に謝れよ。」

にやつと笑つてそう言つたのは隼人でした。そしてその言葉で光汰は我に返りました。

ガラガラ、と椅子を引いて、突然光汰は立ちあがりました。皆驚いて、再び視線が光汰に集中しました。光汰は緊張しながら、一気に言いました。

# 賢治のまちから 高校生大選挙



「ぼく見ました。やつたのは隼人君です！」

一瞬のうちに、クラス中がざわざわと騒がしくなりました。

「隼人君、本当なの？」

由梨先生が尋ねました。隼人は鼻で笑いながら言いました。

「もうばれちゃったのか。つまんないの。」

その後、光汰は剛に話しかけられることはないものの、いじめはぴたりとやみました。それに対し、隼人はますます皆から嫌われ、行いも悪くなる一方でした。

もはや光汰の知る隼人ではなくなり、またどうしてそうなってしまったのかも光汰にはわかりませんでした。

しばらくたつたある日の放課後のことです。皆が教室で遊んでいる中、隼人は由梨先生に言われて、一人で教室の扉の掃除をさせられていきました。

光汰はそれを見て、（もう一度だけ本心を聞いてみよう）と決心しました。雑巾を持ってくると、隼人の隣にしゃがんで、掃除を手伝い始めたのです。隼人は顔を上げると、「コウちゃん」と微笑みました。光汰はその笑顔を見て、（ああ、元のハヤトくんだ）と安心しました。

「コウちゃん、ありがとう。それから今までごめんな。俺がどうしてこんな風になっちゃったか不思議だつたろうね。」

光汰はうなずきながら、（でももう元通りだ）と思つていました。

「俺、もうすぐ引越しするんだ。」

「えっ……？」

光汰は言葉を失いました。

「それで、みんなと別れるのがつらくて、心が不安定になっちゃって……。隼人はうつむきました。光汰は何も言えませんでした。

「さあ、コウちゃんが手伝ってくれたおかげで、もう終わつたよ。早く帰ろう。」

そう言って隼人は立ち上がりました。光汰も立ち上がろうとしたそのときです。光汰の足に何かが引っ掛かりました。そして光汰は水の入ったバケツごと倒れてしまったのです。

光汰は自分の足元を見ると、自分の足に隼人の足がかかっているのが見えました。

「ハヤトくん……？」

びちゃびちゃになつた光汰を見下ろしているのは、もう元の隼人ではありますでした。

「あーあ、やつちやつたね、光汰。でも俺の仕事は終わつたから、あとは一人でやつてくれ。じゃあな。」

そう言つて隼人は教室を出ようとしましたが、立ち止まつて振り返りました。

「あつそうそう、さつきの話、全部嘘うそだから。」

光汰の目からは涙があふれてきました。始めから手伝わなければ「みんな」とにはならなかつたと悔やまれました。

そのとき、光汰の目の前に手が差し出されました。光汰が驚いて顔を上げると、なんとその手は剛のものでした。

剛はそっぽを向いたまま言いました。

「立てよ。拭ふくの手伝つてやるから泣くんじゃねえ。」

「剛君……。」

光汰はその手をとつて立ち上がりました。すると、クラスにいた男子たちがだれともなく集まつてきて床の水を拭いてくれたのです。

「みんな……、ありがとう。」

光汰が言つと、剛は言いました。

「誤解すんなよな。俺は借りを返しただけだからな。」

他の男子たちは口々に、「それにしても本当に隼人はひどい奴だ」と言い合つしていました。

次の日から、光汰は休み時間に男子たちから声をかけられるようになりました。

「光汰、一緒にカードゲームやろうぜ。」

「あの、ぼくやり方わからないから……。」

「いいから。教えてやるよ。」

賢治のまちから

# 高校生大賞



始めは緊張気味だった光汰も次第に打ち解けていきました。（みんなと遊ぶつてこんなに楽しいんだ）と久しぶりに思い出しました。しかし、反対に隼人は席で一人ぼっちでした。

それから数日後、隼人が学校を休みました。光汰は今まで学校を休んだことのない隼人が休むことが、内心になりましたが、他に気にしている人はありませんでした。

その日の帰りの会です。由梨先生が皆に言いました。

「今日隼人君はお休みだと思ったけれど、実は家庭の事情で転校することになったの。本人の希望で、みんなに言わないでほしいということだったので、急なお知らせになってしましました。」

それを聞いてクラスの皆は内心喜んでいましたが、先生の手前、それを表には出しませんでした。光汰はもうわけがわからなくなっていました。

光汰はさようならのあいさつの後、一目散に走り出しました。しばらく訪れていない隼人の家へと向かいます。

もういらないんだろうか、という不安を覚えながら、自分の足の遅さを呪いました。

とうとう隼人の家が見えてきました。家の前には一台の車が止まっています。

「ハヤトくん！」

光汰は目いっぱい叫びました。すると、ちょうど車に乗り込もうとしていた人影が、驚いてこちらを見ました。

「コウちゃん！」

光汰は、はあはあ、と息がはずんでしゃべることができません。

「コウちゃん、俺があんなにひどいことをしたのに、来てくれたんだね！」

光汰は笑顔で答えました。

「……、今度こそ、元のハヤトくんに戻ったんだね。本当の理由、教えてくれるよね？」

すると、隼人は光汰に親指を突き出しました。

「うまくいっただろ？」

そう言つて隼人は白い歯を見せました。

「え？」

# 賢治のまちから 高校生大賞



「俺とコウちゃんの立場を入れ替えるのが、だよ。コウちゃんがいじめられているの、どうにかしたいとずっと考えていたんだけど、ちょっと前に引越しが決まったんだ。これはチャンスだと思って。どうせ俺はいなくなる人間だから、いくら嫌われてもいいだろ？だから思い切ってやってみたんだ。予想以上にうまくいって、コウちゃんが皆の仲間に入れてもらえるようになつてよかつた。」

隼人は心底うれしそうに笑っています。光汰の目には涙が浮かびました。

「じゃあ、全部ぼくのために……？」

光汰の頭の中に、今までの隼人の行動が走馬灯のように駆け抜けっていました。

「もう、コウちゃんは最後まで泣き虫だなあ。」

そう言うと、隼人は車に乗り込みました。

「もう行かなくっちゃ。コウちゃん、来てくれてありがとう。これからもうまくやれよ。」

光汰はなんと言つたらよいのかわかりませんでしたが、何とかこれだけ言うことができました。

「手紙、くれるよね。」

「もちろんさ。」

ブルルルルン、といつて車が走り出しました。

隼人は車の窓から顔を出して、笑顔で手を振っています。光汰も笑顔を返そうとしますが、顔がくしゃくしゃになってしまい、うまく笑顔をつくることができません。

涙でかすんだ隼人の姿に向かって、光汰はいつまでも一生懸命に手を振り続けていました。